関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

書家・高橋松顧と修道士・アントン・チェスカ：バチカン図書館収蔵、高橋松顧関連史料を巡る問題

著者	小川 仁
図書名	KU-ORCASが開くデジタル化時代の東アジア文化研究：オープン・プラットフォームで浮かび上がる、新たな東アジアの姿
開始ページ	307
終了ページ	316
出版年月日	2022-03-31
URL	http://doi.org/10.32286/00026601

Creative Commons：表示 - 非営利
http://creativecommons.org/licenses/by-nc/3.0/deed.ja

書家・高橋松顧と修道士・アントン・チェスカ
――バチカン図書館収蔵、高橋松顧関連史料を巡る問題

小　川　　仁

Shoko TAKAHASHI and Anton CESKA
― About the materials of Shoko TAKAHASHI conserved at Vatican Library

OGAWA Hitoshi

Takahashi Shoko's collection of photographs and a letter detailing the circumstances leading to the dotation of this collection are presently held at the Vatican Library. Irrespective of their huge historical importance, these historical materials were mostly forgotten for a long time. This paper offers an exhaustive analysis of the said collection of photographs and the background leading to their donation.

The materials of Takahashi Shoko is composed on "the dedication letter to the Pope Pius 11th" (dated December 1933), Inventary of the old hand-copied sutra, and the 8 old hand-copied sutras "Koshakyo" (the Heian era, the Kamakura era, the Nara era, and the Muromachi era).

Takahashi's background is known a little. According to a collection of Biographies of hobbyists in Niigata Prefecture "Etsusa Shumi no Hitobito" (published in 1938), he live in Niigata city, comes from a noble family in Raigouji village. Moreover he is an authority of committe of a hobby in Niigata Mainichi newspaper, and a critic of paintings and calligraphic works, and a person who dedicated a letter to the Vatican Museum, having received a commission from the Pope.

According to dedication letter by Takahashi, in the opinion that the offer of the found documents to the Holy Father may have some usefulness for the study of religious problems, after counseled with Anton Ceska, Prefect Apostolic of Niigata and a monk of Society of the Divine Word, he have granted the honor of offering them to the Holy Father for his Museum. Sutras belong to Daihannya.

In this paper, while focusing on the relationship between Takahashi and Ceska, I will discuss the old hand-copied sutra dedicated by Takahashi to the Vatican, and doing so will bring to fore a little-known fact about the cross-cultural history between Japan, Niigata, and the Vatican.

キーワード：バチカン図書館、高橋松顧、アントン・チェスカ、
日本・バチカン文化交流史、ピウス 11 世

はじめに

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）は、2017 年 9 月にバチカン図書館、北京外国語大学、ローマ大学とのあいだで、バチカン図書館が所有する東アジア関連史料をデジタルアーカイブ化する協定を締結し、当該史料へのメタデータ付与等、協定に基づく活動に従事してきた。

本論文では、上記活動の展開過程において確認した、バチカン図書館収蔵日本関係史料、とりわけ昭和前期に新潟で活躍した書家、高橋松顧によってローマ教皇ピウス 11 世に献呈された古写経、および献呈添状を取り上げ、古写経献呈に至った経緯、及びその背景を、他の史料との比較を織り交ぜながら考察を進めて行く。ここで、本題に入る前に、バチカン図書館の概要と、高橋松顧関連史料の調査・研究に至った経緯に触れておきたい。

《バチカン図書館概要》

ローマ教皇庁の図書館にして、世界最古の図書館のひとつである、バチカン図書館（La Biblioteca Apostolica Vaticana）、その歴史を紐解くと、4 世紀半ば、ローマのラテラノ宮殿内に設置された図書室にまで遡る。その後、教会大分裂による資料群離散などの過程を経て、1448 年に教皇ニコラウス 5 世が資料群をバチカンに移し、1590 年頃に教皇シクストゥス 5 世が「新図書館」を建設して、現在のような形に至っている。

バチカン図書館には、歴代の教皇が所有していた古写本などに加え、購入本やさまざまな経緯を経て収蔵されるに至った遺贈品などがある。それら収蔵史料は、刊行本：160 万冊、写本・手稿：約 8 万点、15 世紀の初期刊行本：8600 冊以上、コイン・メダル：約 30 万点、鋳型・下絵等：約 15 万点、写真等：約 15 万点という具合に、実に多彩で膨大な数となっており、ラテン語やギリシア語をはじめ、ヨーロッパの各言語、アラビア語、中国語、日本語などあらゆる言語を網羅している。とりわけ、これら収蔵資料のなかには、羊皮紙上に書き写された聖書等に、挿絵や文様などの装飾が施されている「装飾写本」が多数含まれている。

2011 年には、キリシタン禁制に関わる重要史料であるマレガ文書が発見された。マレガ文書とは、戦前の日本において大分を中心に布教活動に従事し、「古事記」のイタリア語訳も出版しているサレジオ会のマリオ・マレガ神父（1902 ～ 1978 年）が収集した棄教証文などの 1 万点を超えるキリシタン関連史料を中心に構成された史料群である。現在では国文学研究資料館が中心となって、調査・研究を進めている。この他にも慶長遣欧使節をヨーロッパへと送り出した伊達政宗の教皇パオロ 5 世宛書簡などもあり、日本史、日欧交流史を解き明かすうえで欠かせない史料が数多く収蔵されている。

《バチカン図書館収蔵日本関連史料と研究クラウドファンディング》

これらの日本関連史料のなかには、資料登録されただけで、その内実や来歴が定かでないも

のも非常に多い。冒頭でも触れたように、協定に基づく調査において、KU-ORCAS の一員である筆者は、こうした日本関連の史料群をデジタル化し、メタデータを付与すべく、現地に赴き、該当する全ての史料に目を通し、概要把握に努めてきたのであった。このような過程のなかで、新しい歴史的事実を含む史料を、いくつか発見するに至り、そのなかに高橋松顧関連史料が含まれていたのである。バチカン図書館に収蔵されている高橋松顧関連史料や、その他の日本関連史料の研究が進み、日本関連史料のバチカン図書館への収蔵経緯が解明されれば、日本・バチカン文化交流史研究に新たな歴史的側面が見出され、当該研究分野発展への学術的貢献に繋がる可能性がある。

このような背景のもと、高橋松顧関連史料をはじめとしたバチカン図書館収蔵日本関連史料の研究深化を図るべく、KU-ORCAS ではクラウドファンディングによるバチカン研究プロジェクト「バチカン図書館に収蔵された日本関連史料の謎に迫る！」を立ち上げ、127 名の支援者から￥2,379,400 もの支援を得て、当該研究調査を実施、その研究成果を 2021 年 3 月 20 日に Zoom によるオンラインシンポジウムで発表するに至った。

当該シンポジウムでは、長年に亙り高橋松顧について研究活動を続けている新潟大学教育学部教授の岡村浩（鉄琴）が、高橋松顧の人物像、バチカンとの関わりについて発表している。本論文では、岡村の研究成果に依拠しつつ、カトリック新潟教区の教区長、アントン・チェスカと高橋との交流や、ドイツ語史料、イタリア語史料の分析を織り交ぜながら、高橋松顧がバチカンに古写経献呈に至った経緯を考察していく。なお、2021 年 9 月現在、新型コロナウィルス感染症の影響で、海外調査の実施が非常に難しく、現段階で入手しうる史料を用いての限定的な分析となるため、本格的な海外調査に向けての前段階的な議論となることを予め書き添えておく。

1. 高橋松顧の人物像

バチカン図書館に眠る高橋松顧関連史料は、高橋松顧が教皇ピウス 11 世に宛てた古写経贈呈添状一通〔図 1〕のほか、古写経贈呈添状イタリア語訳一通、贈呈状一通、平安期写経大般

図 1 〈高橋松顧が教皇ピウス 11 世に宛てた贈呈添状前半〉整理番号：Vat.estr.or.41.pt.A

図 2　〈平安期写経大般若波羅密多経第百八十三巻〉
整理番号：Vat.estr.or.41.pt.A

若波羅密多経第百八十三巻一通〔図2〕、及びそのイタリア語タイトル一通、鎌倉期写経断片（色紙貼付）一通、平安期写経断片（色紙貼付）一通、奈良期写経断片（色紙貼付）一通、室町期写経断片（色紙貼付）一通、鎌倉期・室町期の写経破片が貼付された色紙一通、これらを梱包する箱一つの、計11点の史料で構成されている。

図 3　高橋松顧の肖像写真
（高橋松顧『豚饅頭』聴濤書院、1937 年、125 頁。）

贈呈日が昭和 8（1933）年 12 月と明記された贈呈添状には、要約すると「古い寺より入手した古写経を、東京帝大に鑑定依頼したところ、非常に貴重な古写経であることが判明し、新潟市で展覧会を開催、カトリック新潟教区の教区長、アントン・チェスカ神父（Anton Ceska, 1877-1951）に相談し、世界の様々な問題の解決に繋がればと思い、教皇ピウス 11 世に自ら収集した古写経を贈呈した」といった内容が記されている。

新潟でこれら古写経の展覧会が開催されたのは、昭和 8 年 12 月であり、当時の新潟新聞、[1] 新潟毎日新聞[2] には、展覧会の告知記事が掲載されており、展覧会から時を置かずして、バチカンに古写経を贈呈したことがわかる。では、高橋松顧とはどのような人物だったのであろうか〔図 3〕。高橋松顧について簡単な評伝が記載されている『越佐趣味の人々』、[3] 岡村の論考「バチカン収蔵史料につながった高橋松顧を理解するために」[4] をはじめとした岡村の見解をまとめると、以下のようになる。

高橋松顧は、新潟県三島郡越路町来迎寺村（現在の新潟県長岡市来迎寺）の素封家、高橋家

1）「古写経展開催に就いて（一）～（七）」（『新潟毎日新聞』昭和 8 年 12 月 12 ～ 18 日付）
2）「珍宝の公開　資料編纂官激賞　古写経展覧会　奈良、平安、鎌倉、室町の各時代を網羅　十六、七両日本社楼上」（『新潟毎日新聞』昭和 8 年 12 月 16 日付）
3）吉岡金峰『越佐趣味の人々』大新潟時報社、1938 年、「書道の部」10 頁、「高橋松顧」の項において、「新潟市関屋田町、新潟毎日新聞餘技展委員で斯界の重鎮、先年ローマ法王の委嘱に依り同国博物館に献書せる人、書画の鑑定家、本家は三島郡来迎寺村の名門」と明記されている。
4）岡村浩「バチカン収蔵史料につながった高橋松顧を理解するために」『研究クラウドファンディング報告会「バチカン収蔵東アジア関連史料に見る日本」報告書』、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター、2021 年、13-16 頁。

出身、世継ぎの事情で家を出ている。[5] 書家である一方、鑑定家でもあり新潟毎日新聞餘技展委員を務めていた人物である。[6] 手習いの初歩に、漢文・国文・作詩・文字学を叩き込まれたという。[7] 昭和元年頃に越路町から舟江（現新潟市）に移住。昭和8年12月、奈良、平安、鎌倉、室町の各時代を網羅する古写経展覧会を新潟市で開催、[8] その後、これら古写経を教皇ピウス11世に献呈した。昭和12（1937）年、満州に渡り、漢字と書の本場の文化を探っている。[9] 直後に満州旅行のルポタージュ、『豚饅頭』を出版。当該図書の出版元は、聴濤書院となっているのだが、これは、新潟市中央区関屋田町に高橋が自宅に開いた子供向けの書塾の名前と同一である。高橋は、昭和14（1939）年に聴濤書院開塾三周年記念冊子である『三周年を記念して』を著していることから、[10] 戦後しばらくまで続いた当該書塾は、昭和11（1936）年頃に開かれたと推測される。[11] 昭和3（1938）年に、高橋は息子を亡くしており、通学していた関屋小学校へ二宮尊徳像を寄付している。[12] 昭和14（1939）年には、ふるさとで客中作を揮毫した。[13] 昭和26（1951）年には、「神明照覧」を揮毫、これは昭和12年創業の小林百貨店社長であった小林與八郎により、新潟市の白山神社に奉納された。拝殿正面に掛けられた、この隷書四大字の巨額は、現在でも参拝者を見守り続けている。[14] なお、高橋がどのような最期を迎えたかは、明らかとされていない。

では次に、高橋松顧の性格や信条などを見ていきたい。高橋は先に触れた記念冊子のなかで、自身の書に対する姿勢を以下のように述べている。

> 「書いて書いて書きぬいて自己の書を獲得せねばならぬ。展覧会に入選位で天狗になっちゃモウ無理です、着眼点を高く、研究の範囲を広く深く何処までも学徒として研究心を捨てぬやうに、一方またよく読んで頂きたいのです。～中略～　要するに漢字と埃及文字とは偶然かは知らぬが両方の六義と称するものが似通って居り又象形文字名などもソックリのものが多くあるといふ事だけは反駁の余地は無いのである。私も一にも二にもなく埃及文字が母体とだという意見に賛成するのではないがともかく興味深いものだから古い時代の東西の交通路を按じてお互いに研究したいと思ひます。」[15]

5）岡村鉄琴「書家・高橋松顧に関する断片的記述」『新潟県文人研究』第二十一号、越佐文人研究会、228頁。
6）吉岡、前掲書、11頁。
7）岡村鉄琴、前掲書、229頁。松顧開塾三周年記念冊子『三周年を記念して』（昭和14年、A5版、総頁数34頁）の岡村による要約を参照。
8）岡村浩、前掲書、15頁。
9）岡村浩、前掲書、15頁。
10）岡村鉄琴、前掲書、230頁。
11）岡村鉄琴、前掲書、230頁。
12）岡村浩、前掲書、15頁。
13）岡村浩、前掲書、15頁。
14）岡村鉄琴、前掲書、228頁。
15）岡本鉄琴、前掲書、229頁。高橋による『三周年を記念して』からの抜粋。

以上の高橋の回想により、高橋の書に対する真摯で実直な態度が読み取れるばかりか、東西交渉史を念頭においた比較文明論的な視野から、文字の発祥を比較研究的な手法で以て解き明かそうとしていたことがわかる。このように高橋松顧の人となりを概観してみると、高橋が国際的かつ学際的な視野から書を眼差していたことは明らかであり、バチカンへの古写経献呈も、それほど唐突なことではないのである。では、高橋の古写経献呈に大きく関わった人物、アントン・チェスカ神父とはどのような人物だったのだろうか。次章で見ていきたい。

2. アントン・チェスカの人物像

高橋松顧のバチカンへの古写経献呈に大きな役割を果たしたアントン・チェスカとはどのような人物だったのだろうか。アントン・チェスカ〔図 4〕は、1877 年にオーストリア＝ハンガリー帝国統治下のトリエステ（現在はイタリア領）に生まれた、神言修道会（Societas Verbi Divini）の宣教師である。神言修道会は、1875 年にアーノルド・ヤンセンにより設立された海外宣教を旨とした修道会で、チェスカは 1900 年、23 歳の時に当該修道会に入会している。以下のチェスカの略歴は、カトリック神言修道会日本管区日本管区長ジェブラーラ・エウゲニウス師より提供頂いた資料を中心としてまとめていく。

1905 年、ウィーン郊外の聖ガブリエル大神学院（神言会）で司祭に叙階されると、1907 年、神言修道会の宣教師日本派遣に伴い来日、秋田で活動を始めた。翌年には新潟市内に設立された「山の教会」の司祭に着任、1912 ～ 1920 年に神言修道会日本管区長を務めた。1926 年 6 月 ～ 1940 年 10 月に、カトリック新潟使徒座知牧区第二代知牧長に就任、1913 ～ 1934 年には新潟教会の主任司祭も兼任していた。なお知牧長在任中の 1926 年 12 月～ 1927 年 9 月には新潟大聖堂の建設に携わっている。1940 年に活動拠点を多治見へと移し、1951 年 4 月 29 日に名古屋市の神言神学院で没した。このように見ていくと、チェスカは 1908 年に新潟に来訪以来、知牧長を辞任する 1940 年までのあいだの実に 32 年間を新潟で過ごしたことになる。地域に根差して宣教活動をしていたことは明白であり、同じく新潟において幅広い知見のもとに活動していた高橋松顧と、知己を得ていたとしても、それは何ら想像に難くない。またチェスカは、30 歳で来日後、終生を日本での宣教活動に捧げた人物である。時代の流れに翻弄されながら、彼の胸中には様々な思いが去来したことであろう。チェスカは法哲学者の尾高朝雄（1899 ～ 1956 年）との共著で、『日本とその人びと』[16] を 1932 年にウィーンで出版、そのなかに「共存

図 4　アントン・チェスカ神父
（Anton Ceska, 1877-1951）

16）Anton Ceska, Tomoo Odaka, *Von Japan und seinem Volke*,（Vienna: Katholischer Akademischer

の地より」[17] というエッセイを寄せている。著作中でチェスカは自らの日本への思いを次のように述べている。

「私は日本で第二の家というものを発見しました、いや単なる発見ではなく、経験したというべきでしょう。自然の美しさ関して言えば、大体の私の好みは親愛なるオーストリアではあるが、もちろん日本にも数々の美しさがあり、そこには、世界で最も美しいものを持つ光景が広がっているのである。」[18]

「日本の社会生活には美しさがある。しかしながら列島という地理的位置の問題や、言語としても習得が困難である故に、他に属する人びとには理解されることがない。日本人は、言うなれば主人たる皇帝とともに、ひとつの大家族を形成しており、どこでも同じように作り上げ、どこでも同じものを食べ、どこでも同じような祭りに興じるのである。日本の強みは、まさにそこにあるのであり、それはまるで、家庭も家庭生活も神聖とみなされ、国家生活の基礎として認識されているようなものなのである。」[19]

一つ目の抜粋では、チェスカが長年住みついている日本に対し、この上ない愛着を抱き、それを、日本と祖国オーストリアの原風景に秘められた美しさを併置して捉えることで表現していることがわかる。そして２つ目の抜粋では、地理的要因や言語障壁の高さによる、日本を理解することの難しさに触れるとともに、チェスカが自身の日本理解に深く切り込んでいる。日本が天皇を中心とした大家族のような国家であり、それが国民に違和感なく浸透していることで、独特の一体感が形成されていたと、チェスカが日本の国家体制を認識していたことがわかる。そしてその認識は、エッセイの結部である次の抜粋でさらに具体化していく。

「ここ数ヶ月のあいだ、日本のことや東アジアでの出来事の数々についてやたらと取り沙汰されている。日本にとって形勢不利となる意見が多く出ていて、それは実情に疎いせいだと、私個人としては信じて疑わぬところではあるが、あえてここでは立ち入るまい。ただ、政局と直結しない点のみ指摘しておきたい。すなわち、重大な懸案、とりわけ外交案件にあたっては、政府と国民は表裏一体だということである。政府の背後には国民［の支持］があり、国民は自国の政府を信頼している。まさしくこの信頼のおかげで、政府は、国民に強い責任感を抱くようになるとともに、必要とあらば、英断を下し実行するだけの力を

Missionsverein, 1932

17）“Aus dem Lande des Nebeneinander”

18）Ceska, *Ibid.*, p. 18.

19）*Ibid.*, p. 20.

も与えられるのである。」[20)]

このエッセイが執筆されたのは 1932 年であるが、その年には第一次上海事変、前年には満州事変が起きている。これらの事件を契機に、国際世論の日本への批判は急速に高まり、孤立を深めつつあった時期である。上記の抜粋は、風雲急を告げる情勢のなかで、日本のことを誰よりも理解していると自負していたチェスカによる、日本擁護の姿勢とも見て取れる。更には、日本に向けられていた批判に対して一定の理解を示しているものの、二つ目の抜粋にあるような、欧米人から見たら独特な風土の日本、そして彼が愛してきた日本への理解が広まらないことに対する、チェスカのもどかしさが文面に現れているようにも見える。

このようにチェスカの著したエッセイに目を向けてみると、高橋松顧が古写経献呈添状で述べていた「世界の様々な問題の解決に繋がればと思い、教皇ピウス 11 世に自ら収集した古写経を贈呈した」との見解は、高橋松顧のみならず、チェスカの意向も少なからず反映されていた可能性があると捉えるのは、あながち間違いではないように思われる。次章では今回の調査で新たに見出した古写経献呈に関するイタリア語史料を読み解きながら、古写経献呈をめぐる高橋とチェスカの関りに目を向けていきたい。

3. 論文雑誌『ラ・チヴィルタ・カットリカ』(*La Civiltà Cattolica*)に見る古写経献呈

論文雑誌『ラ・チヴィルタ・カットリカ』(*La Civiltà Cattolica*)は、教皇ピウス 9 世の勅令によってイエズス会が開始した出版プロジェクトで、1850 年に創刊された、カトリック定期刊行物の中でも最古のものの一つである。[21)] 当該雑誌は毎月第一、第三土曜日に出版されており、そのなかには、イタリア、海外の時事ニュース、ローマでの出来事の項目も含まれている。筆者が 1930 年代を中心に当該雑誌を調査した結果、昭和 8(1933)年の高橋松顧による古写経献呈以前の昭和 7(1932)年にも、高橋がチェスカを通じて仏教絵画を献呈していたことが明らかとなった。当該記事を以下に抄訳する。

「神言修道会アントン・チェスカ師(日本新潟カトリック教区長)は教皇に対し、3 点の絵画を献呈した。これは、カトリック教会と教皇への尊敬の証として、仏教徒の高橋松顧から提供されたものである。芸術家(artista)は、カトリックと比較できる何か見出すべく、仏教の神性と祈りを選びたかったようで、絵画の主題には、宇宙の父である日蓮と、女神の観世音菩薩が描かれている。〜中略〜　教皇は芸術作品を賞賛しつつ、代わりに画家(pittore)に厚意を伝えるよう、チェスカに依頼し、同時に《良き司牧者》が描かれた

20)*Ibid.*, p. 24.
21)La Civiltà Cattolica 日本版(https://vj100.jp/lcc/)2021 年 10 月 21 日確認。

大きなメダル一つを彼に与えたのであった。そして教皇は、3点の絵画をラテラノ博物館の中央に近い一室に展示するよう命じたのであった。」[22)]

上記は1932年7月30日号の記事である。高橋から提供された絵画3点が、チェスカを通して時の教皇、ピウス11世のもとに渡っていたことは明らかである。しかしながら教皇から下賜されたメダルが、チェスカが受け取ったのか、チェスカを経て高橋のもとに渡ったのか、あるいは、画家が受け取ったのか、そして、画家と高橋が同一人物かを判断することは、この段階では難しい。いずれにせよ、古写経献呈以前に、高橋とチェスカが教皇に仏教関連のものを献呈していた事実は重要である。次いで1934年の『ラ・チヴィルタ・カットリカ』に明記されている高橋とチェスカの古写経献呈の記事について見ていきたい。

「画家で仏教徒の高橋松顧は、チェスカ師（日本新潟カトリック教区長）を通して、1932年に、カトリック教会と教皇への尊敬の証として、いくつかの絵画を献呈しているが、カトリックと比較できる何か見出すべく、絵画の主題には仏教の神性と祈りを選んでいる。最近になって高橋は、仏教祈祷文の極めて古い写し数点を、教皇に献呈した。～中略～教皇は、貴重な献呈品に大変喜ばれ、バチカン国務長官を通して、献呈者に対して感謝状を届け、さらには格別たる厚情の証として、聖年記念の銀メダルも追加したのであった。」[23)]

高橋松顧による古写経献呈は、昭和8（1933年）12月の出来事であったため、当該記事は翌年の号に掲載されているものと考えられる。当該翻訳では中略としているが、記事中には、高橋による献呈添状の内容をそのままイタリア語に翻訳したかたちで、献呈に至る経緯、古写経の内容が詳細に記されている。

昭和7年の高橋による絵画献呈の記事では、高橋と絵画の作者が同一か否か、メダルの授与者が誰だったのか不明瞭であったが、昭和9年の上記記事と併せて読むと、日蓮と観世音菩薩を描いた絵画の作者が高橋本人である可能性が高く、メダルの授与者も高橋であったことがわかる。

つまり、上記2つの記事をまとめると、高橋はチェスカを仲立ちとして、昭和7年に日蓮と観世音菩薩が描かれた絵画3点、翌年にも古写経を教皇に献呈して、いずれの献呈においても、返礼として教皇からメダルが授与されていたことになる。これまでは、高橋が思い立ってチェスカに相談し、単発的に古写経を献呈したものと考えられていたが、高橋による絵画献呈の事実が明らかになったことにより、高橋とチェスカのバチカンへの仏教資料献呈行動が、何らかの意図を持って継続的に行われていた可能性が強まったと言える。

22）“Cose Romane” *La Civiltà Cattolica,* 83（1932）, n. 3, p. 289.
23）“Cose Romane” *La Civiltà Cattolica,* 85（1934）, n. 3, p. 436.

現段階では、史料不足により、上記以上のことを断言することが難しいが、可能性の議論として、ひとつだけ言及しておきたい。

満州事変に続き勃発した 1932 年の第一次上海事変をとおして孤立を深める日本に対し、親日家であったチェスカが憂慮の念を抱いていたことは、先のチェスカのエッセイでも触れたとおりである。可能性の一つとして、日本に対して並々ならぬ愛着を抱いていたチェスカと、東西交流に対し進取的な思想を持っていた高橋、両者の利害が一致したことで、彼らは教皇への仏教資料献呈という文化的行動へと駆り立てられていったのではないかと考えられる。

そして、高橋が献呈した絵画 3 点が収蔵されたラテラノ博物館を開設するなど、学者肌の気質も持ち併せていた教皇ピウス 11 世の意向も反映されていた可能性もまた否定できない。つまり、仮定の域をでないが、チェスカ、高橋、教皇ピウス 11 世それぞれの何らかの意図が絡み合って 2 回にわたる仏教資料献呈へと繋がり、それによりバチカンと新潟とのあいだに文化的な交流がうまれたということになるのである。

おわりに

以上のように、高橋松顧とアントン・チェスカを巡るバチカンへの古写経献呈について考察してきた。新たな史料調査により、高橋とチェスカが 2 回にわたり仏教資料をバチカンに献呈したことが明らかとなった。両者の継続的な献呈行動の意図・目的の解明は、史料不足により至っていないが、今後研究を進めて行くに当たっての、重要な指針を得たことは、極めて意義深い。

当該研究の今後の課題・調査方針としては、新潟におけるチェスカの手稿史料の調査、バチカン文書館に収蔵されている教皇ピウス 11 世文書を隈なく調査することにより、2 回にわたる献呈行動の経緯の解明、及び日蓮・観世音菩薩が描かれた絵画 3 点の発掘ということになるであろう。また、高橋松顧が受領したと思われるメダル 2 点、感謝状 1 点の発掘も、岡村教授とともに進めて行く必要がある。

また調査の進展次第ではあるが、高橋松顧の人物像やカトリックとの関係性、古写経献呈に至った経緯の解明、そして、高橋松顧とバチカンとの邂逅から、昭和戦前期新潟における国際交流の一端を鮮やかに浮かび上がらせていくことに注力していきたい。なお、今回紹介した高橋松顧関連史料は、バチカン図書館デジタルアーカイブ（下記 URL 参照）において、当該デジタル画像を閲覧することが出来る。

https://digi.vatlib.it/view/MSS_Vat.estr.or. 41.pt.A

最後に、当該論文を書き進めるにあたり、アントン・チェスカの経歴についてご教示頂いた、カトリック神言修道会日本管区長 ジェブーラ・エウゲニウス・ヨゼフ師、及びドイツ語翻訳の一部をご指導下さった多賀健太郎氏に、衷心より感謝の念を表したい。